

岡部藩主安部家とその周縁

埼玉県立文書館 学芸員
高田 智仁

はじめに

武蔵国血洗島村(現深谷市)が生んだ偉人渋沢栄一(1840 - 1931)は、青年の時分に御用金調達のために父の名代として領主の陣屋へと出頭した。その際に領主の代官から嘲笑を受けたことで幕府政治の弊、身分社会の不合理的に対する強い発憤の情を心中に沸き起こしたとのエピソードは有名である。

栄一を罵倒した代官の主君こそ、何を隠そう武蔵国岡部に本拠を置いた大名・岡部藩主安部家である。

偉人渋沢栄一を嘲った悪玉として岡部藩・安部家のイメージばかりが出てしまうのはあまりに惜しいことと言わざるをえない。そこで、岡部の地を治めたこの安部家がどのような藩主であり、どのような活動をしていたのか、とりわけ文化面の観点からその周縁をみていきたい。

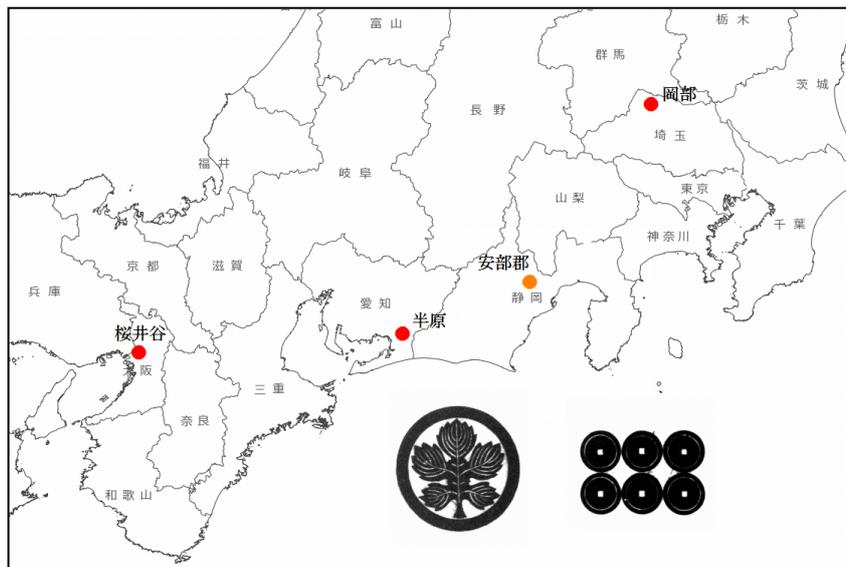
1、岡部藩と安部家

岡部藩は、安部信盛の祖父元真(1513 - 1587)の時分に、徳川家康(1543 - 1616)に属して武功を重ね、天正十八年(1590)の家康の関東入国に際して元真の子・信勝(1552 - 1600)が武蔵国榛沢・下野国梁田に拝領した5250石を礎に発展した。

信勝の子・信盛の時代には、三河国八名郡内に4000石、次いで慶安二年(1649)には大坂定番に任ぜられ、摂津国四郡内に10000石を加増されて大名となった。

その後、信峯(1659 - 1706)の代の所領高計20250石が、岡部藩安部家の表高として確定した。天明七年(1787)時点では武蔵国4377石余、上野国874石余、摂津国7000石、三河国6000石、丹波国2000石となっている。五か国に分散した所領を束ねるため、本拠地の岡部のほか、三河国半原(現愛知県新城市)、摂津国桜井谷(現大阪府豊中市)にそれぞれ陣屋を設けて分割統治の形式をとっている点、本拠地の関東よりも上方に多大な所領を有していた点は岡部藩の特徴の一つといえる。

慶応四年(1868)、最後の当主・信発が半原への本拠移動を願い出て許され、半原藩となっている。



【県立文書館収蔵文書群概要】

「武蔵国岡部藩主 安部家文書」…593点
⇒収蔵文書目録 42『諸家文書目録VI』（以下、安部家文書）

「池田氏収集 武蔵国岡部藩主安部家文書」…70点

⇒大正二年（1913）に陸軍軍医監池田謙齋の次男が安部家に養子に入り家督を相続（安部信明）。家臣の行跡録である「藩中家譜」、藩政日記「為後録」など（以下、池田氏収集文書）

「高橋家（岡部藩安部家家中）」…199点
⇒半原陣屋詰。御用状など

※近年、愛知大学日本史学専攻近世近現代史ゼミによって「三河国八名郡岡部藩半原陣屋御用状留」の翻刻が進められている。

	藩主	生没年	領知高
	安部信勝	天文 21－慶長 5（1552－1600）	5250 石
1	安部信盛	天正 12－延宝元（1584－1674）	19250 石
2	安部信之	慶長 9－天和 3（1604－1683）	20250 石
3	安部信友	寛永 15－元禄 14（1638－1701）	22250 石
4	安部信峯	万治 2－宝永 3（1659－1706）	20250 石
5	安部信賢	貞享 2－享保 8（1685－1723）	同上
6	安部信平	宝永 7－寛延 3（1710－1750）	
7	安部信允	享保 13－寛政 10（1728－1799）	
8	安部信亨	宝暦 8－文政 5（1758－1822）	
9	安部信操	寛政 2－文政 8（1790－1825）	
10	安部信任	文化 6－文政 11（1809－1828）	
11	安部信古	文化 12－天保 13（1815－1842）	
12	安部信宝	天保 10－文久 3（1839－1863）	
13	安部信発	弘化 3－明治 28（1847－1895）	
	安部信順	安政 4－大正 10（1858-1921）	

※安部家では安部元真をもって「御元祖」とするがここでは諸侯に列した信盛から数えた。

2、安部家と大坂勤番

勤番…諸大名、旗本らの遠方要地における勤めを指す。

大坂勤番

大坂城代 1名

定番 2名（京橋口、玉造口）

大坂城代の補佐役として設置された役職で、城代の下で大坂城守衛を主としながら西国で発生した問題処理の補佐に当たるほか、大坂町奉行の取り仕切る行政面にも参与するなど西国統治の重責を担った。与力三十騎、同心百人が配された。

定番は担当する城門付近に屋敷を与えられ、江戸に住まわせるべき妻子を伴ってその任に当たった。任期は無く、十年以上の勤務をするものも多数にのぼっている。

加番 4名（山里・中小屋・青屋口・雁木坂）

大坂城の警備に当たった大番を支える加勢役であり、寛永年間に始まった。任期は定番と異なり一年と定められており、着任する人数は時代によって変遷があるが、制度の定着以降は山里・中小屋・青屋口・雁木坂に各一名の計四人が就任している。

○定番 ⇒ 就任時に費用として 3000 両が下賜されたほか、延享二年（1745）からは在任時に年間役料 3000 俵（1200 石）が支給されることとなった。

○加番 ⇒ 任期中扶持米が支給。延享三年（1746）には、山里加番 27000 石、中小屋加番 18000 石、青屋口・雁木坂加番がそれぞれ 10000 石の役高が定められ、その四つ物成（四割）が金や米などによって支払われている。加番周旋の運動をする大名も！

【表1】安部家当主定番就任者一覧

藩主名	在任期間	担当	加増
①安部信盛	慶安2～万治3年 (1649-1660 12年)	京橋口	10000石 (摂津)
②安部信之	寛文8～延宝5年 (1668-1677 10年)	玉造口	3000石 (三河)
③安部信友	貞享3～元禄14年 (1686-1701 16年)	玉造口	—
⑦安部信充	明和8～天明元年 (1771-1781 11年)	玉造口	—
⑧安部信亨	寛政7～文化元年 (1795-1804 10年)	京橋口	—

※表1は、「大坂定番一覧」(特別展図録『徳川大坂城—西国支配の拠点—』大阪城天守閣、2008年)を参照。

※表2は、「大阪加番大名一覧」(徳川時代大坂城関係史料集第一号『大坂加番記録(一)』大阪城天守閣、1997年)を参照。

【表2】安部家当主加番就任者一覧

藩主名	在任期間	担当
③安部信友	延宝8年(1680)	青屋口
⑥安部信平	元文2年(1737) 寛保元年(1741)	青屋口 青屋口
⑦安部信允	宝暦3年(1753) 宝暦13年(1763)	中小屋 青屋口
⑧安部信亨	天明6年(1786)	中小屋
⑨安部信操	文化10年(1813)	青屋口
⑩安部信任	文政10年(1827)	青屋口
⑪安部信古	天保3年(1832) 天保13年(1842) ※途中死没	青屋口 青屋口
⑫安部信宝	安政5年(1858) 文久2年(1862) ※途中交代	青屋口 山里口

大坂勤番のメリット

- ① 初期の大坂勤番就任時に加増された畿内領からの藩収と大坂勤番を介して支払われる役料。

※文化八年(1811)時の岡部藩年貢 ⇒ 7140石余(金換算6090両余)

内訳：摂津3654石 丹波：581石 三河：1652石 武蔵・上野：1252石

※明治年間に記された「[岡部藩略史]」(安部家文書No.121-5)

「安部家カ富裕ナル大名中ニ数ヘラレシハ岡部領外ニ領地アリシニ因レリ」

- ② 文化的先進地域であった上方の文化吸収、人的ネットワーク構築の促進。

3、勤番が繋ぐネットワーク

増山正賢

1754-1819(宝暦四-文政二)。伊勢長島藩主。号は雪斎。安永五年(1776)、父正賛の死去によって伊勢長島20000石の家督を相続する。安永七年(1778)、天明元年(1781)、同三年(1783)、寛政元年(1789)の4度に渡って大坂城加番を歴任する。

中国文物趣味を愛好した文人大名の代表者で、長崎に自身の書画の批評のために長島藩御抱画師であった春木南湖を派遣したほか、藩儒の十時梅厓、大坂の木村兼葭堂など中国文化を愛好する人々との交際があった。

離縁することとなったが、息子である正寧の正妻は安部信亨の娘。

①雲室『雲室随筆』

雪斎曾君増山河内守殿^{伊勢長島侯}大名にての一人にて、風流抜群の人なり。書画ともに直に華人によりて修せらると申事なりしが、当時世の中の振合遠慮被致、風流家出入も皆断りにてありき。安部摂津守殿^{武州岡部侯}、武田安芸守殿^{高家}、久世三四郎殿、井戸甚介殿、皆河内守殿交り厚友にて有りけり。

②十時梅屋 内田蘭渚宛九月二十一日付書状（享和元年筆）

一、安部侯墨蘭之儀承知候、則近習之人へ懸合候処、此節ハ侯も抹茶のミ、其他御用向繁、筆硯之儀ハ兎角延引勝と申候。依之、拙者珍藏之寄合書

○長島侯 竹 ○安部侯 蘭 ○董九如 梅 ○武田安芸守 菊 ○稻垣若狭守 靈芝

右寄合書唐紙半切もの有之候、右を少々酒へ被成被下候ハ、御讓可申候、御好ニ候ハ、当所ニテ修覆申付、後便差上申候、否御報可被下候。云々

木村兼葭堂

1736－1802（元文元－享和二）。字は世肅、号は兼葭堂のほかには巽斎。大坂の商家に生まれて家業の傍ら、大名、漢詩人、書画家らと交流し、大坂における一大ネットワークを築いた。また長崎の来舶清人とも交際があった。寛政二年（1790）、酒造に関する不正の冤罪密告があった際には伊勢長島藩に匿われたほか、増山正賢の加番明けには同道して江戸に赴いて歓待をうけるなど昵懇の仲であった。

①木村兼葭堂『兼葭堂日記』

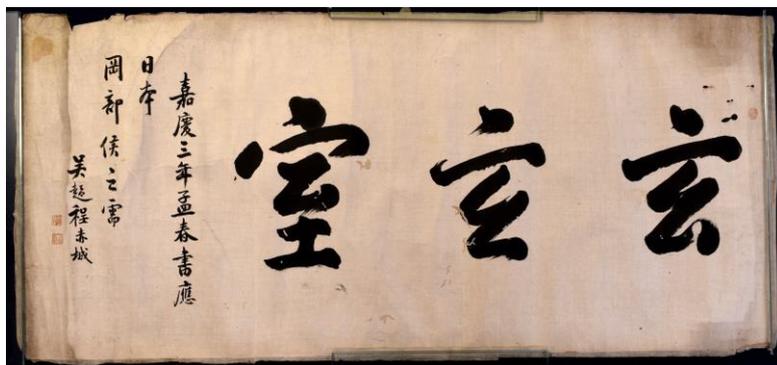
- ・天明6年閏10月14日条...早天春木氏同伴城入、安部撰津守様邸へ行
- ・天明7年8月8日条...夜八ツ時ヨリ船ニテ安部撰津守侯発賀ヲ京橋迄送ル
- ・寛政11年19日条...早朝出京橋中屋敷、昼迄御前ニ有、帰路菊池等家中皆々廻り

②木村兼葭堂 長円寺宛二月六日付書状（寛政七年筆か）

一、兼而御約束仕申候、唐人之額字色々申遣し申候、今度出来候間進上仕候、以前と違候而長崎六ヶ敷候而、唐館頼事容易相成り不申候、延引仕申候、相認申候費晴湖と申至而雅人ニて画なども仕候人ニ御坐候

③安部家文書No.540 程赤城「書（玄玄室）」

落款：嘉慶三年（1798 寛政十）孟春書応／日本／岡部侯之需／吳趨程赤城



※程赤城…1735～1808～。名は霞生、字は赤城または柏塘。長崎来舶商人の一人で、安永六年（1777）から文化五年（1808）までの30余年間に18回に渡って日本を訪れていたことが記録されている。大田南畝、司馬江漢、春木南湖、十時梅屋ら多くの文化人と面識を持ったほか、木村兼葭堂らとも交信。請われて多々筆を振るったため、長崎をはじめ各地に揮毫した作品が残る。

④池田氏収集文書No.2 「〔藩中家譜 四〕」菊池安兵衛武昭

一、同（寛政）六甲寅正月十日、麴町方出火類焼有之。／四谷御屋敷ニ罷在候節、三月二日御小袖被下置候。五月三日、唐本前後漢書并明之陸宙種画御掛物被下置候。

※陸宙種…生没年不詳（清代 18 世紀頃）。字は歩衡、号は漁六。浙江平湖の人。山水、花鳥、人物画等を巧みにした。

空々琴社

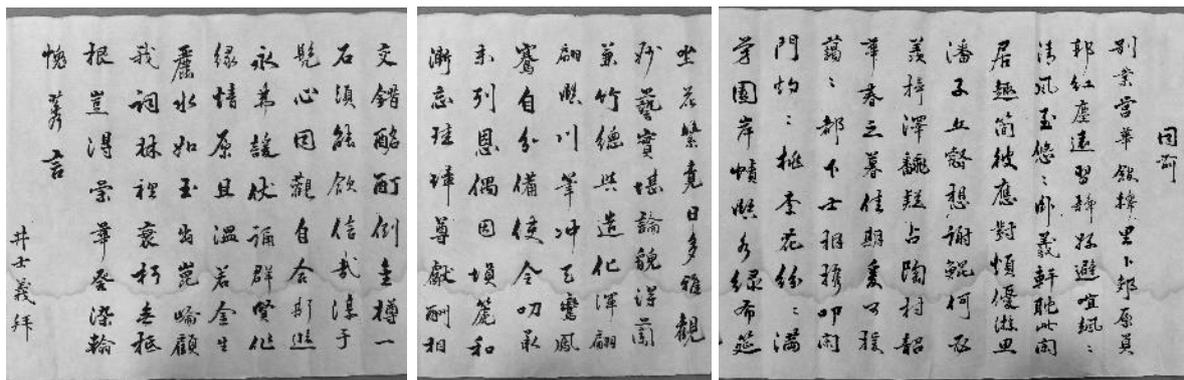
江戸で活躍した琴士児玉空々（1735 - 1811）の立ち上げた琴社。空々は、名を慎、字を黙甫といい、別に宿谷空々とも称された人物で、田安德川家の藩儒として勤める傍ら琴を学び、牛込安養寺を会場に活動した。

社友…97 人（大名、幕臣、諸藩士、文化人らにて構成）

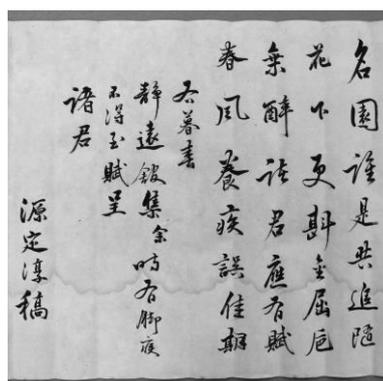
長島侯（増山正賢）、岡部侯（安部信亨）、久世三四郎（久世広景）らも参加。

①安部家文書No.196 詩卷「暮春 岡部侯の静遠館に従ず」

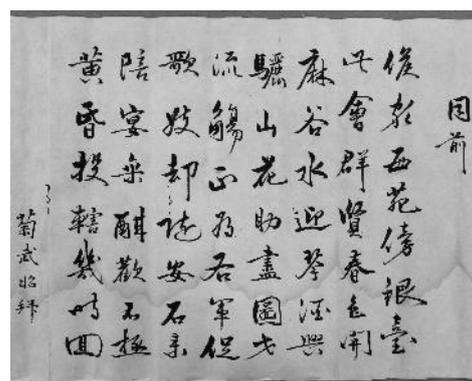
安部信亨の屋敷新築祝いに、空々琴社、長島藩士のほか、近江山上藩主稲垣定淳、画師渡辺玄対らが参加して詩を詠じた際の詩卷。特筆すべきは岡部藩士の詩が寄せられている点。



岡部藩儒井上士義



近江山上藩主稲垣貞淳



岡部藩家老菊池武昭

※稲垣貞淳…1762-1832（宝暦十二-天保三）。定番、加番それぞれ一回を勤めた大名。また稲垣家は増山家と縁戚関係にあり、定淳の女姉妹が正賢に嫁ぎ義兄弟の関係にあった。貞淳は天明四年（1784）に正賢とともに江戸に下向してきた木村兼葭堂帰坂の送別会に出席している。その折には定淳のほか、正賢、渡辺玄対ら詩卷にも名がみえる顔ぶれが出席している。

4、文雅のネットワーク

柳沢信鴻

1724－1792（享保九－寛政四）。川越藩主であった柳沢吉保（1659－1714）の孫、大和郡山藩主。俳号を米翁とし、信濃松代藩主真田幸弘（俳号菊貫 1740－1815）、姫路藩主酒井忠以（俳号銀鷺 1756－1790）らとともに俳諧に没頭し、天明頃から隆盛する大名俳諧の中心に位置した人物。長年に渡って記された日記に『宴遊日記』『松鶴日記』がある。増山雪斎と昵懇の人物として名が挙げられた武田信明（安芸守）の父。

安部家と俳諧

⇒ 信允：俳号 浦夕 信亨：俳号 月舟・芭蕉庵 信操：俳号 嵐翠
信宝：俳号 柳翠亭春暁

①『宴遊日記』

・安永3年11月21日条

浦夕廿八日浪花へ赴くを送る

過し秋下りし比ハ熱田鳴海の蚊にせめられ嶋田金谷の蠅にくるしみ給ひしもいつしか箱根佐夜の北ふゝきあら井桑名の朝嵐を凌て浪華に急く旅路の労を思ひて浦夕へ申おくる
向ふ風頭巾ぬく日を着く日哉

・安永4年12月14日条

○西都へ遣す山水之丹青浦夕への代写珠成持参、明日遣す

・安永5年2月26日条

○昨米駒、浦夕会に出、点付持参、浦夕在番、近日発行に就、此会男児賞ひ三評に成由

②安部家文書No.510 「拾枇庵」

落款印：「月邨所」、「紫子」



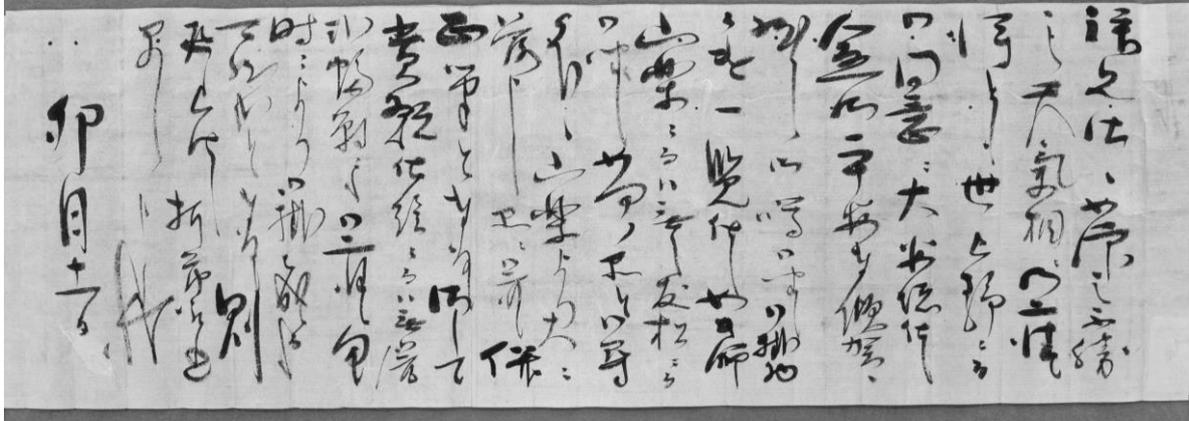
※落款印に用いられる「月村所」「紫子（庵）」は、柳沢信鴻、息子保光の俳号。

※信鴻の可能性が高いが、信鴻は息子里之に多く代筆させており判じがたい。

※柳沢里之…1758－1804（宝暦八－文化元）。信鴻の五男で越後三日市藩主となり、大坂加番を勤める。俳号は珠成。里之には信允の娘とミ子が嫁いでおり、安部家と柳沢家は縁続きの関係であった。

松平治郷

1751-1818 (寛延四-文政元)。出雲国松江藩藩主。不昧の号で茶人として大いに名声を得た。道を通じて多くの大名、文化人らと交流、また師弟関係を結び、不昧流の一派をたてた。その著作には『古今名物類従』などがあるほか、茶器の収集に努め、収集した茶器を集成した『雲州蔵帳』がある。

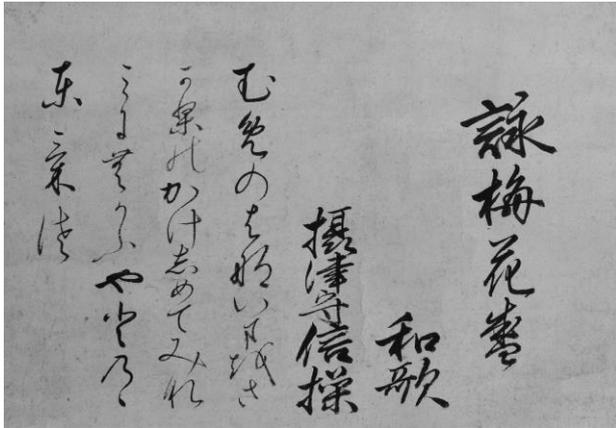


①安部家文書No.66 [掛幅友松正筆ニ付書状]

松平出羽守から安部丹波守宛てに送られた書状。安部家側から鑑定依頼があった掛軸について海北友松である旨を認めた書状。

※松平治郷が出羽守になったのは明和四年(1767)。その時期に該当する安部家当主は信允と信亨。信允は寛延三年(1750)から明和八年(1771)まで、信亨は安永四年(1775)から天明元年(1781)まで丹波守に任ぜられていた。

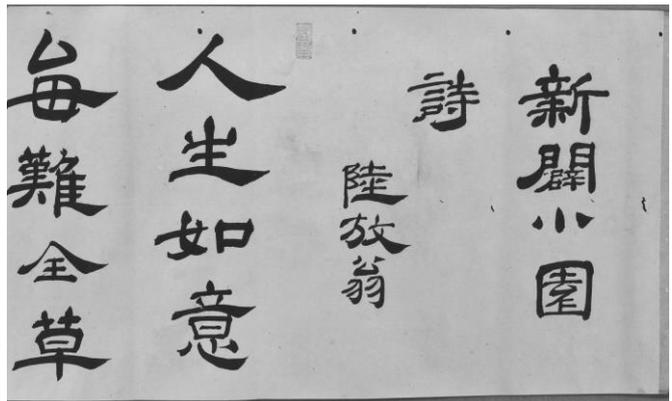
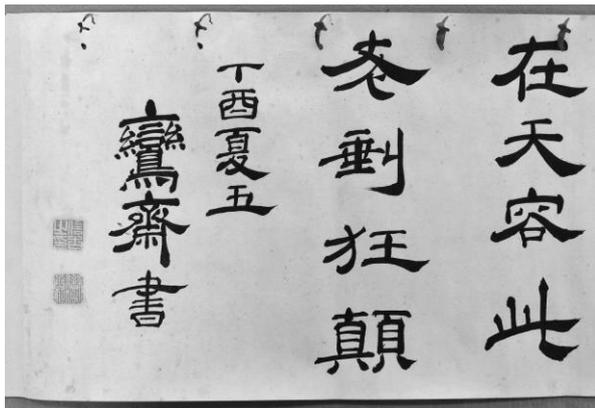
5、安部家の書



←安部家文書No.524

安部信操筆「詠梅花盛和歌懐紙」

↓安部家文書No.193 安部信古筆「新關小園詩」



おわりに

- ・これまで脚光を浴びてこなかった安部家・・・文化活動ならびに人的ネットワークの意外な広がり
- ・大坂勤番が生み出した「役得」
 - ⇒ 畿内領の年貢、大坂の銀主
 - ⇒ 増山正賢文化圏からの大きな影響
 - ※安部家、特に信亨は唐物趣味を有していた大名の一人として位置付けられてもおかしくない。
 - ※増山正賢をはじめ大名、文化人らと親交があった大田南畝との接点の可能性も
 - ⇒ 大坂勤番大名間ネットワークの存在
 - ※増山家、稲垣家、柳沢家（三日市藩）らはいずれも大坂勤番を経験する家柄。
- ・安部信允、信亨父子の時代は安部家の文化的黄金期

【参考文献】

- ・『新城市誌』（新城市、1963年）
- ・『埼玉県教育史』第2巻（埼玉県教育委員会、1969年）
- ・福島雅蔵『幕藩制の地域支配と在地構造』（柏書房、1987年）
- ・斉藤伊勢松『岡部藩始末』（斉藤伊勢松、1997年）
- ・『新編埼玉県史』通史編3近世1（埼玉県、1988年）、
- ・『新編埼玉県史』通史編4近世2（埼玉県、1989年）
- ・岸邊成雄『江戸時代の琴土物語』（有隣堂、2000年）
- ・『新修豊中市史』第8巻社会経済（豊中市、2005年）
- ・『新修豊中市史』第1巻通史1（豊中市、2009年）
- ・菅良樹『近世京都・大坂の幕府支配機構 所司代 城代 定番 町奉行』（清文堂出版株式会社、2014年）
- ・森竹敬浩『安倍奥の雄、安部家代々と金山衆 山人たちはいかに徳川政権樹立支えたか』（静岡新聞社、2016年）
- ・神谷智『江戸時代の地方役人と村人の日常の日々
 - －「三河国八名郡岡部藩半原陣屋御用状留を読む」－』（株式会社シンプル、2017年）
- ・本多美佐夫『半原藩―三河領よりみた安部家―』復刻版（富岡地域研究会、2018年）
- ・図録『大坂加番 仰せ付けられ候』（勝山城博物館、2011年）、
- ・図録『大名と藩―天下泰平の立役者たち―』（埼玉県立歴史と民俗の博物館、2012年）
- ・図録『没後200年記念 増山雪斎展』（三重県立美術館、2019年）

ほか